

になった。幸いにも、フアイトというエネルギーだけは持ち合わせていたため、念願の県大会、東北大会に優勝することができ、成就感に浸ってはいたものの、研修の必要性を教えられた時期でもあった。

教育雑誌等の論説会を通して、「授業の質的改善の方法」「研修のあり方」などの重要性について薫陶を受けたことは、今なお、自分の考え方に大きな影響を及ぼしている。

機会があつて、生徒指導の長期研修に参加し、登校拒否など不適応行動についての理論や事例等の研修の場に臨み、貴重な体験を得ることができた。そのため、以前より物事に對し幅広くとらえることができてきたが、反面、現実の対応では、慎重に扱えば扱うほど迷いや悩みも生じ、悪戦苦闘したこともあつた。

やがて、「教育の原点」とも言われる障害児教育について研修する機会にも恵まれ、三年間、東京での生活を送った。

養護学校の子供達は、ハンディキヤップを持ちながらも精一杯生きていた姿が、今でも忘れられない。

「子供から学ぶ」という視点は、毎日の教育活動の中で、創りあげては壊し、さらに創りあげては壊されたくり返しの中で再確認できた。発達評定と指導、評価と教育プログラム

の設定、集団指導と個別指導のかかりなどの一連の学習指導についても、ここで学び得たと思う。

現在は、管内教育相談を担当し、登校拒否など諸問題の相談にあたりているが、今になってやっと相談者として、共感できる立場に立てるようになってきたように思う。

千羽鶴

中島 一枝

「両親はけんかばかりしていて家の中は地獄なの。離婚するかもしれないので急いで帰って来たの。会社の方は部屋長になつたけどなかなかまとまらないし、ちつとも良い事がない。」

できる限り家から遠くへ離れたいと中学校を卒業するとすぐ三重県の紡績会社へ就職して行つたかつての教え子がとつとつと話している。

貧しかったのでずつといじめられつ子だったというY子。酒を飲んで暴力をふるう父親から母親をかばつて打たれたY子。こんな事もあつた。

「痛い、痛い。Y子助けて。」
母親の声に起こされてY子はタクシーを呼んで病院へ連れて行つた。

かつて、上司から贈られた、「一期一会」の言葉の意味をかみしめ、今までの折々のことを、心の糧として、二十一世紀に生きる子どもたちと共に、一層精進していきたいと思つている。

(いわき市立平第一中学校教諭)



昼間転んで足を骨折していたのだという。即入院という事になってY子は入院の準備をして再度病院へ。夕方は弟妹達に夕食を食べさせて又病院へ、と一日に何度も往復したのはY子が中学二年生の時だった。何回も何回も泣きながら彼女は自分をみがき、大人顔負けの気配りや仕事の段取りの良さを身につけてきたのだ。

私の教科係になったのが縁で色々話し合う機会も多かったのだが、精一杯生きているY子に何と言ってやったら良いのだろう。

「あのね、私の母が今入院しているんだけど、患者さんの方が健康な人達より何倍も心の痛みや暖かさを知っているみたい。」

と極限状態で生きている人達の頑張りとお互いのいたわり合いに深く心を動かされていたので、その話を聞いてもらった。

「人間で弱いものよ。誰でも優しくされたいと願っている。でも優しさをおあげる人もいないとね。仕事の続かないお父さんだつてきつと苦しんでいるわ。優しくしてあげて。そしてつらい時ほどスマイルスマイル。」
折角来てくれたのにはずれの話だつたかなと自分を責めながら、日課になつている病室を訪ねると、母の枕元にY子からの見舞の花が飾られていた。隣の人のベッドにも。

「オラまでもらつて。」
と嬉しそうなおおばあさん。

それから一カ月後に、部屋の人と一緒に折つたという千羽鶴が届いた。「早くお元氣になつて下さい。」の添え書きがあつた。仕事と学校で自由時間がほとんど無いY子達は睡眠を削つて折つたに違いない。

その鶴はまもなく母と共に天へ昇つて行つたのだが、母のバッグの中にはY子からの見舞の手紙が大切にしまわれていた。余程嬉しかったのだろう。

優しさの何たるかを知っていたのはY子の方だつたような気がする。

(棚倉町立高野小学校教頭)